

## 第 107 回「さんか・さろん」まとめ

・2021 年6月 15 日(火)

・「互産互消という、旧くて新しい地域間交流のカタチ」

・佐藤雄一さん

(合同会社互産互生機構代表社員)

講師の佐藤雄一さんは現在、コンセプト株式会社代表取締役でツーリズムや商品開発のプロデューサーを。あわせて自然体で地域おこしをやっている方です。「互産互消」については、昨年 11 月にも掛川市の話題で触れていただきましたが時間切れになったため、いま一度のリクエストで今回お願いしました。

冒頭、スローライフ・ジャパンの川島正英理事長から紹介が。「佐藤雄一さんは、わが NPO・学会が 2001 年 11 月、掛川市で一カ月の“スローライフ月間”をやったときにお目にかかってからのおつきあい。“川島人名辞典”のなかでは『市民運動をアウフヘーベンした人』となっています。アウフヘーベン、哲学用語ですが“止揚”高めてとどめる、と訳されます。対立したものを高めて、その上でとどめる。佐藤さんは「地産地消」という地方政治経済にとって大切な考えを「互産互消」という考えへと高めました」

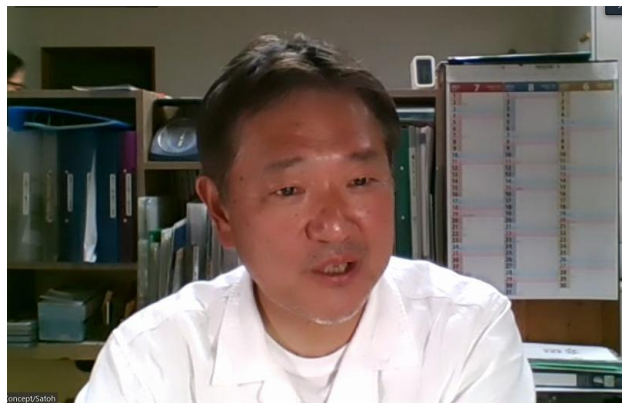
そして、2017 年5月放送の NHK 静岡「互産互消」特集番組を視聴。その後、佐藤さんのお話となりました。

.....

### 美味しい物を届けよう・食の交換

スローライフ・ジャパンと同じくスタートして、掛川市でも 20 年間スローライフに取り組んできた。「地産地消」の概念を持続的に発展させ、新しい地域間交流をやろうとするのが「互産互消」。運動を名称にしたもので、設立した合同会社の方の名前は、「消」えるより「生」かすが相応しいと考え、「互産互生」機構とした。

発端は 2009 年、京都府京丹後市間人(た いざ)へ、商工会青年部の仕事で通うようになったこと。板壁の家々、入り組んだ街や路地、



海岸線ギリギリまで棚田が続き太平洋側にはない景観や風情だった。行く度に違う旅館に泊まらせて頂き、丹後米やカレーの干物など、さりげないけれど抜群に旨い朝食に驚いた。人や文化の面白さに触れ、すっかり魅了された。しかし、緑茶だけは掛川に優位性があった。京丹後の食材と掛川の緑茶を組み合わせれば、どんなに素晴らしいかと思った。

北海道豊頃(とよころ)町とは、「報徳思想」の繋がりがきっかけで交流している。北海道も急須で入れたお茶を飲んでいない人ばかりだった。掛川市は「茶草場農法」が世界農業遺産に認定されたお茶の産地。緑茶のおいしさを知らない町に、お茶を売り込もうと思った。試飲会でお茶のおいしさをPRすることを重ね道内 70 店舗で扱われるようになった。

静岡県のもう一つの特産はワサビ。長野や岩手も産地だが、静岡市にはワサビ栽培発祥の地があり、ワサビ田で作られている水ワサビが特産品。京丹後や札幌で、大手食品メーカーでないローカルのチューブ入りワサビを販



売すると大好評だった。そして、北海道ではフルーツの栽培が乏しいことを知った。逆に静岡には多彩なフルーツが栽培されていた。

掛川市には「キウイフルーツカントリー JAPAN」という国内最大級のキウイフルーツ農園があり、60 種もの品種を改良し平均8種のおいしいキウイが販売されている。10 ~12月に収穫した実を追熟させて1~4月に売り切るのが通常のところ、十勝のトウモロコシの雪室が1~6月に空いているところに目を付け、半年間、雪室で眠ってもらったキウイを「スノーキウイ」と命名し、夏場に国産キウイとして販売した。2 個 350 円。現地の方に販売してもらい、これも好評を得た。



遠州地域は柿の産地でもある。奥歯のような形の四角い「次郎柿」は硬くて甘いのが特徴で、これも北海道へ毎年1トンを送っている。ただ送られてくるだけではつまらない！と現地のパティシエが産地を訪ね、柿スイーツに挑戦した。生産者に試食してもらったが香りが少ないフルーツはスイーツには向かないこと、逆に干して加工した柿の使い方はまだまだ可能性があることもわかってきた。

沖縄県うるま市は沖縄本土のほぼ中央に位置し、人口 12 万人。掛川市と同規模人口で、静岡空港からの就航地として交流している。天然塩やモズクが美味しい。緑茶生産はあるが、掛川の深蒸し茶のようなタイプではないので、持参すると掛川茶は良く売れる。



### 互いの町から買い込みも

豊頃町からは、大きくて太い「たんざく」と呼ばれる切り干し大根。小豆・大豆などの良質な豆類。道内各地からは、乳製品やワイン。京丹後からはサバを糠漬けにした「へしこ」や、太くワイルドな感じの珍しい「堀川牛蒡」。うるま市からは天然塩、フリーズドライのもずくスープ。

掛川の新幹線駅舎内にある「これっしか処」では、これらの商品を特徴的に売っている。紹介カードはもちろん、時には現地からの販売員もやってくる。店長の中田繁之さんは「互いの町のファンになったり、ここでしか買えないので店のリピーターへと繋がっている」と語る。十勝のスーパーでも、静岡産や京丹後産の品々を集め、「互産互消フェア」と名打った特設イベントを催したり。ただ売り買いだけでなく、各地の個性ある食材をマリアージュさせて、食卓を豊かにする献立を提案している。

## ツーリズムの交換

食文化の交流は、食の交換以外にも地域の生活や観光資源を活かした旅の交歓へと発展している。十勝川で凍った氷が海岸に打ち寄せる「ジュエリーアイス」は、極寒の2月ならではの風物詩。湖面に穴をあけてワカサギを釣るのも、温暖な静岡県民にとってはスペシャルな観光資源だ。

静岡は、茶畑の景観と、それを観ながら移動し、満喫できるサイクリングが観光資源。標高 250 メートルから掛川市を一望できる小笠山は、低山ならではの魅力が多い。12 月中旬まで楽しめる紅葉も「低山トレッキング」としてアプローチできるアウトドアレジャーだ。

特にサイクリングは、「北海道⇄静岡県サイクリング交流ツアー」や 2009 年から「十勝とよこサイクルライド」「ゆるゆる遠州ガイドライド」で交流している。互いのベストシーズンを数十名で訪ね、互いにガイドし合い、ツーリズム



商品に仕立てている。例えば、富士山静岡空港に降り立ったら、そのまま自転車に乗って掛川城を目指す。途中、広大な茶畑の風景や、上半身しか見えない茶畑独特の農道も、サイクリングには面白い資源として皆で共有している。サイクリングは「互産互消」の価値普及に大きな役割を果たしている。

旅の交歓から、実際にお互いの地に住んでみたらどうかという実験もした。温暖化は静岡

県に酷暑の夏を、北海道では荒れる冬をもたらしている。移住定住という前に、例えば真夏の三ヶ月間だけ十勝に住んでみるとか、真冬の三ヶ月間だけ掛川に住んでみるといった二地域居住の考え方が生まれてきた。2人ずつ1週間、3回に分けて豊頃町と掛川市お互いの地を居住する実験を行った。



2017年3月“地域間交流の新次元”と題したフォーラムを実施

掛川市と豊頃町では公式に「互産互消(生)推進協定」を結ぶことができた。これまでの活動の一つの成果だと考える。掛川市 12 万人の人口と豊頃町 3,000 人を比較して批判的な意見も聞こえたが、豊頃町とその周辺の十勝全域なら 38 万人、北海道なら 540 万人だ。一方、掛川市も大井川から天竜川の圏域で 46 万人、静岡県なら 360 万人で、エリア対エリアで考えれば世界の小国並みだ。掛川北緯 34 度、十勝は 43 度。9 度違うと年間平均気温も 9℃ 違う。自ずと農作物も違う。日本国内で交易が出来ると感じている。太平洋側と日本海側の産物の違いの実感と、京丹後の食材の良さに静岡の深蒸し茶を合わせたらどんなに美味しいだろう? の発想からここまで来ることができた。

## 地域学は生活楽

私たちは、「ローカルライフスタイル研究会」として活動している。何がその地域の魅力かと考えると、根ざした生活だろう。生活を楽しんでいるローカルの人々との交流はとびきり楽しい。環境が違う地域に浸かって自分の地域を眺めていると、その良さがよくわかるようになる。それを交換すると個性が顕在化される。これを続けているとアンチ東京にもなる。「ふるさと納税」も「移住定住促進」も大きな要素は、東京からどう奪うかだが、一長一短には進まない。東京ばかり気にしないで、必然性をもった食卓の交換や二拠点居住が、ひとつのステップになって移住定住へと繋がると考える。



.....  
佐藤さんのお話が一区切りしたところで、お仲間から

## 「互産互消」のお仲間から



◇京丹後市・野木武さん:間人(たいざ)は聖徳太子の母・間人(はしうど)皇后に由来した

土地。観光マップ「間人の人になる」とか、ここで生まれた「互産互消」の造語にまだ地元は追い付いていない気がする。佐藤さんと知り合っているいろいろな土地との交流が始まり、改めて人と関わるのが大切と感じている。

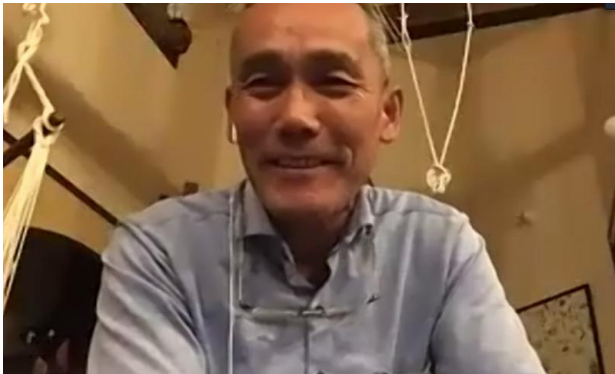
◇豊頃町・越後秀顕さん:佐藤さんとは平成25年から。物の交流・人の交流・事業へと繋がりが、「互産互消」やサイクリングによって人口3千人の町の交流人口が増えたことに感謝している。

◇豊頃町・森喜美江さん:切り干し大根の福神漬けや豆の加工品で、皆さんに喜んでいただいている。掛川との交流で人と知り合い、文化を知る事が出来ている。はじめは北海道でお茶なんて…と思ったが、今では無くてはならない飲茶の習慣が生まれた。健康がキープできているのもそのおかげかな。フルーツも暖かいところから寒冷地へ運ぶことで糖度が増すことも知った。



◇下田市・土屋信由さん:もともと「地産地消」の考え方に共感していたが、facebookで「互産互消」を知った。小さなコミュニティーに留まらず、拡がりを感じる考え方だと理解してきた。  
◇更別村・為廣正彦さん:大規模農業の更別村は帯広エリア。仕事で豊頃町に事業提案を呼び掛けたのがきっかけで、掛川市とは報徳思想で繋がりが、やっていることは“推譲(すいじょう)”。共鳴したのは“東京への意識を外してみよう”という考え方。成功事例が少ない首都

圏への売り込みやめて、求められる地域へ、少しずつ広めようとする取り組み。毎月の様に掛川へ遊びに行っていたので、コロナが明けたら早く静岡の川で釣りがしたいと思っている。「互産互消」は単なるビジネスを超えて、お互いの人生を豊かにするアイテムだと思う。



.....  
**【質疑】**

●は感想・質問、( )内は居住地。○は佐藤さんの答え。

●将来山梨でまちづくりに携わりたいと、都内の大学に通っている。地方では地域内で地域資源(人・物・金)を回す活動を見てきたが、発展性に疑問を感じていた。多面的にみると地域間交流やローカル to ローカルは、これからの時代だからこそ可能性のある話だと魅力を感じている。自分も山梨をフィールドに何か起こしたい野望を持ちつつ、佐藤さんやスローライフ・ジャパンの活動を拝見している。(山梨県)



発展性に疑問を感じていた。多面的にみると地域間交流やローカル to ローカルは、これからの時代だからこそ

可能性のある話だと魅力を感じている。自分も山梨をフィールドに何か起こしたい野望を持ちつつ、佐藤さんやスローライフ・ジャパンの活動を拝見している。(山梨県)

●言葉にインパクトがあり、面白かった。このシステムに加わりたい場合は、何かルールや条件があるのか。(東京都)

○ホームページでも紹介している。参画したいと声は掛かるが、産品が被るところは意外

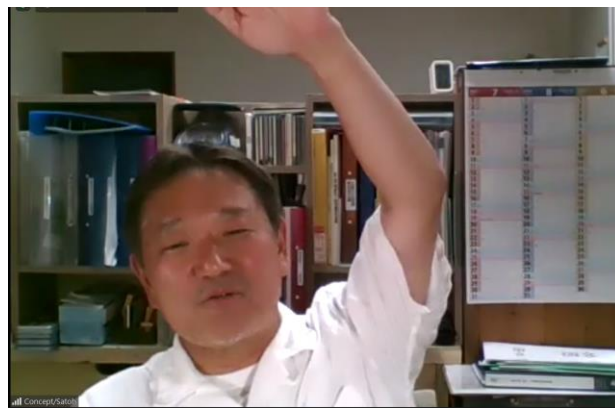
と難しい。まずは食材の交換から始まり、文化や生活の交換へ展開していきたい。共有できる縁も大事。静岡空港から就航している地域も優位。豊頃町は、独自に他地域とも互産互消の活動を拓げている。

●しくみにも特色を持たせている事がわかった(東京都)

●岩手で生まれ、埼玉から長野の限界集落へ移住してきた。アイデアを形にしていることが素晴らしいと思うと同時に、さて、今日のヒントをどう活かそうかと思う。(長野県)

●下田へ移住して 20 年。地域内で観光がパターン化している。地域資源によく目が届き、可能性があるものを観光に結びつける思考はなぜ?(静岡県)

○コンセプトを作る仕事をしている。商品開発や商いの環境を整えることも業務としている。そこで地域そのものを商品化することを考える。それは広告やPRとは別次元で、ネタや売り物を作るということ。掛川という比較的地味だけれど、生涯学習やスローライフをテーマにしたまちだったから、いろんなことが試行できた。他所の人から教えられてきた事も多い。スーパーマンの様な助役だった小松正明さんが赴任されていたことも大きい。



●物と物がつながる前に“あの人がいる町”と、心と心が繋がる事が大事。役場の掛け声で継続しないのはそこ。ハートの触れ合いがあつて、

みんなでやろうよ！と事が転がっていく。掛川でもスローライフ学会の今日の活動でもそれを感じる。(北海道)



●全国各地の品物を掛川でセレクトしてもらい、掛川の「栗焼酎」と一緒に送ってもらっている。北九州空

港もあるので、また会いたい。(福岡県)

●東京を意識しないのは今一番大事。お互いに相手を思い、相手に与えようとする関係が支えていると感じた。(東京都)

○「互産互消」のロゴは、蚊取り線香の様にぐるぐる回っていますが、互いという字とその関係性をデザインしている。



●「地産地消」を担ってきた直売所は、大手スーパーに取り込まれて生存競争の中で淘汰されている。人と人の繋がりをイメージさせる“お互い様”で元気になる。交流や生活文化を多面的に拓げていくと理解した。課題なのは、我が地域に強い産物があるかどうかなのか？(三重県)

○どの地域にも交流の素材となりうる強みは、地域に根ざす生活の個性やヒト・モノ・コトなど、産物は食材以外にもきつとある。値引きをしない気持ちの良い関係など、商慣習としてやりやすいところ・やりにくいところはあるだろうが、あらゆる可能性を探りたいので、ぜひこれを

機会によろしくお願ひしたい。

●行政が絡んで協定を結んでいたが、この活動に行政はプラス？それともマイナス？(東京都)

○行政に関係なく始めた。地方創生推進交付金の紹介を受け、一年で商社を設立できた。掛川市は静岡県内エリアと捉えて容認してくれているのが極めて良いと感じている。ニッチな事業なので、所管する課のマスを狙う考え方とは合わないところもある。新市長が就任したので、どこまで理解を深めてもらえるかも課題だ。

.....  
終了後、冒頭あいさつした川島理事長から「佐藤さんに『お前たち何やってんだ！』と叱咤された気がする。これまでやってきた逸村逸品の事業化など、スローライフ・ジャパンも頑張らねば！！」と感想がでました。この「互産互消」の動きにご興味を持たれた方は、佐藤さんへご一報を。

(記録:事務局 長谷川八重、野口智子)

---

～お互いの あるもの ないものを 認め合い 求めあい  
活かし合う 新次元の地域間交流を進めます～

*Food 食卓 フードの交換 Tourism 観光 ツーリズム  
の交歓 Lifestyle 生活 ライフスタイルの交感*

合同会社互産互生機構

〒436-0091 静岡県掛川市城下 5-10・1F

TEL.0537-22-0654 FAX.0537-22-0786

E-MAIL. [post@conception.co.jp](mailto:post@conception.co.jp)

ホームページ [www.localtolocal.jp](http://www.localtolocal.jp)

---